Yokoso Obara Iinkai
山里暮らしのあれこれ

おばらのじかん

Take Free［0円］

第30号
2024 Spring

巻頭特集

豊田小原和紙工芸を育てた孤高の芸術家

藤井達吉翁と小原

自然から学べ

［石のように硬い押し寿司の話］
［藤井達吉の面影を辿って］
［マンガ イカくんキンちゃんの小原日記］
［小原いろいろ情報］

小原人集まれ!
「ようこそおばら委員会」
小原人以外でもOK

頭巻特集

藤井達吉翁と小原

小原地区といえば、和紙工芸といわれるようになっている現在。たくさんの和紙工芸家を輩出した小原を知るには藤井先生の話を無しには語れません。その成り立ちと想い、お弟子さんたちの絆を特集しました。

孤高の芸術家 ―自然を愛し自然から学ぶ―

愛知県碧南市生まれの藤井達吉は、小原では豊田小原和紙工芸の生みの親としてよく知られている。大正から昭和にかけて「工芸の近代化」を図り、七宝、金工、陶芸、漆芸、絵画、書、歌、刺繍、図案など多彩なジャンルで、伝統と呼ばれる古い型にとらわれない斬新な作品を数多く生み出した。碧南、小原、瀬戸などそれぞれの地元の産業を、次世代まで続く「工芸」に高め、人々の生活を豊かにしたいという信念を持ち尽力したが、戦後の貧しい暮らしの中で達吉の革新的な考えは理解されがたく、挫折も多く二度の自殺未遂まで起こしている。しかし今日の小原の和紙工芸、瀬戸の陶芸の繁栄は達吉なしでは成しえなかったことであろう。

生い立ち

明治14年（1881）愛知県碧海郡棚尾村（現碧南市）に六人兄弟（三男三女）の三男として生まれる。両親が商売で多忙だったため、実質祖母に育てられる。矢作川の堤で凧を揚げるのが大好きな闊達な少年で、「凧吉」とあだ名がつくほどだった。凧揚げは達吉の少年時代の忘れられない思い出になっている。

また、母、姉妹同様、達吉も手先が器用で、10歳にして自分の着物を縫うのに挑戦したりもした。そのため「針吉」ともあだ名された。

仕事、七宝との出会い

14歳で奉公から実家に戻り、仕事につくが商売には全く向いていなかった。

17歳になり、父の勧めで名古屋の七宝店に就職すると、そこでは制作の仕事に関わることもでき、徐々に自信を取り戻していった。6年たち、会社が「セントルイス万国博覧会」に七宝を出品するために、達吉はアメリカ東海岸オレゴン州に出向く。

残念ながら七宝の人気は衰えはじめ、商売は思わしくなかったが、半年のアメリカ滞在中に訪れたボストン美術館で一流の美術品に出会い、後の達吉の創作活動に多大な影響を及ぼす。

上京

1906年、帰国後七宝店を退職。上京し、美術家の道を歩み始める。1910年、経済的な理由から両親、3人の姉妹が達吉を頼り上京し一緒に暮らし始める。引き取った姪2人も加え8人の大所帯の貧しい暮らしが始まる。しばらくは母、姉妹の針仕事に助けられ生計を立て、達吉は創作活動を続けていった。

美術家としての活躍、交友関係

だんだんと頭角を現してきた達吉の交友関係は幅広く、特に新進気鋭の芸術家が多かった。達吉の作品のコレクターも現れ、経済的にも安定してきたが、画壇、作品等に鋭い批判を投げかける達吉には当然反発する人も出てきた。それでも文展に「工芸部門」を作る運動など果敢に戦い続けた。

小原和紙との出会い

1932年「文雅堂」から図案集出版の依頼を受け、子ども時代に作っていた凧の紙を使用したいと思い探すと、それは「三河森下紙」と呼ばれ、小原村で漉かれていると知る。さっそく15200枚の紙を「小原製紙副業組合」に注文する。これが達吉の小原村、小原和紙との出会いであった。そしてその後、「番傘」「凧」など実用向けだった森下紙は達吉の指導のもと、他に類を見ない「和紙工芸」へと発展する。

1932年に初めての小原訪問、1934年に2回目、そして1936年、紙漉きの指導に招かれ、3度目の小原訪問を行う。

小原和紙を使った藤井達吉創作染織図案集

小原への疎開

1945年、当時達吉の住まいであった真鶴へアメリカ軍が上陸するとの噂もあり、達吉は疎開を考える。場所は勧められた京都でも、家を借りてある箱根でもなく、人々の素朴さに打たれた自然豊かな寒村小原村だった。これは単に都市を離れるだけでなく、自ら選んだ中央美術界との決別でもあった。こうして達吉は在野の芸術家となり、自身の創作活動とともに、地方の産業の繁栄、後進の育成などに力を注いだ。

しかし9年ぶりに訪れた小原では達吉の移住は歓迎されなかった。買う約束をしてあった土地は売ってもらえず、結局希望より随分狭く、その上急斜面という条件の良くない鳥屋平（とやがひら）の土地を購入した。達吉は「素朴で人情が厚い小原の人々が数年のうちに変わってしまった」と嘆いた。

安藤繁和さん　山内一生さん　藤井達吉翁　春日井正義さん　加納俊治さん　小川喜数さん

藤井達吉と小原村の年表

1932年（昭和7）51歳
■夏、文雅堂「藤井達吉創作染織図案集」を出すための和紙を小原村に注文。
■12月、紙のお礼のために小原村を訪問。
■小原村で和紙工芸の指導を始める。

1934年（昭和9）53歳
■2回目の小原村訪問。
■和紙を草木染や赤土などで染色することを教えた。また、「関張」も指導した。
■小原村北大野の山内家に歌碑建立

1936年（昭和11）55歳
■3回目の小原村訪問。

1945年（昭和20）64歳
■3月、姉篠、姪悦子と小原村北大野の鳥屋平に疎開。
■本格的に美術工芸和紙の指導をする。
■8月、鳥屋平で終戦を迎え、小原総合芸術研究会を発足。

1947年（昭和22）66歳
■小原総合芸術研究会を解散し、小原和紙工芸の育成に力を尽くして日展入選作品を出す。

1948年（昭和23）67歳
■9月、「小原工芸会」を創設し、同会より3名の日展入選者を出す。

1950年（昭和25）69歳
■5月、「小原農村美術館」を建設開館。
■12月、小原村より碧南市新川町道場山に転居する。
■転居後は、小原村の若者が碧南などに通い藤井との師弟関係をつづけた。

鳥屋平芸術村

それでも達吉の夢であった芸術村を作るべく、急斜面に小屋を多く建て、瀬戸、真鶴などから陶工、石工たちを招き「小原総合芸術研究会」を発足した。しかし、戦後の食糧難での食料調達をしながらの創作活動は厳しいもので、村を去るものが続き、結局2年もせずに夢は砕かれてしまった。その中でも残った者たちが達吉の指導のもと、和紙の作品を作り続け、そのうちの一人が「つるし柿」というタイトルの作品で日展入選を果たした。

小原工芸会（※現 豊田小原和紙工芸会）

日展入選のおかげで村は活気づき、達吉の教えを請いたいという者が30人ほど集まった。しかし厳しい達吉のもとに残った入門者は結局数人にとどまった。安藤繁和、岩木鉤之、小川喜数、春日井正義、加納俊治、勝常夫、山内一生であった。自然から学べという教えのもと、毎日のスケッチに加えて、達吉は芸術家たるもの礼儀が大切、と礼儀作法にも厳しかった。一流のものを見るように東京に送られ、美術展を見たりもさせられた。

1948年、小原工芸会を立ち上げる。会長に村長の加藤和一郎、会員は安藤繁和、池野登志昭、小川喜数、春日井正義、加納俊治、鈴木逸弥、鈴木仙五郎、鈴木忠夫、鈴木正、山内一生、山内弥市であった。

当時の鳥屋平を描いた和紙作品

しかし和紙工芸家に育てようと厳しく指導する達吉についていけない者、日展に入選するため離れていく者も出る中、小原の冬の厳しさもあり達吉は心も体も疲れきっていく。

小原農村美術館

小原の和紙工芸、漆工芸をこれからもますます発展させていくよう、美術館の開館に向けて働きかける。建物は鳥屋平芸術村の建物の一つを移転するとし、開館に向けての趣意書で「目覚めよ小原人、立ち上がれ。」と強く鼓舞している。1950年5月、美術館は無事開館したが、達吉は式に出られないほど精神を病んでいた。7月、睡眠薬を飲み2度目の自殺を図る。今回も医師に助けられ一命を取り留める。心配する友人の勧めもあり、5年間暮らした小原から碧南への転居を決意する。

達吉と歌碑

小原にはいくつか達吉の歌碑が建っているが2つの歌碑を紹介する。つは、鳥屋平の芸術村に隣接する北大野にある山内弥市宅の庭で、「こふぞうつ 三つひよしこそ さみしけれ 小原の里の 雪の夕暮れ」というもので、弥市が囲炉裏に捨てあった達吉の走り書きを拾い、和紙を収めた際に達吉が多めに支払ってくれたお金で建てたという。これは達吉を大いに感心させ、小原の人の純朴さに心動かされた。

もう一つの歌碑は、岩下にある東泉寺に建つ。当時の住職鈴木賢が、達吉が小原を去って10年ほど過ぎた時、「鳥屋平もいずれ朽ちていく。小原に藤井達吉が居たことを忘れ去られたくない」という気持ちから、和紙に関する歌を作ってくれるよう達吉に頼み、お寺の境内に建てたものである。住職は碑ができる一週間ほど前に急病で亡くなり、これを悲しんだ達吉は歌碑の裏に追悼文を書いている。

小原と藤井達吉の絆となった歌碑（北大野）

四国遍路

達吉は50代をはじめとして生涯に6度の四国遍路をしている。路傍の石、雑草を眺め自己を振り返りながら歩く、というのはまさに達吉の人生そのもののように思える。

晩年

小原を離れた後、転居を繰り返し最後は岡崎に移り、1964年、心臓麻痺で亡くなる。83歳であった。

参考文献
新「藤井達吉物語」[碧南市教育委員会]
藤井達吉の全貌「株式会社キュレイターズ」
自筆自叙伝「矢作堤 藤井達吉」

Y.K

ゆかりの方に聞いた藤井達吉先生。

小原で最後まで藤井先生と交流のあった方やお弟子さんとゆかりのある方々、和紙のふるさと職員の冨樫さんにエピソードなどをお聞きました。

藤井達吉と小原の人々　後列のひげをたくわえた人物が藤井達吉
前列のベスト着が山内一生さん、着物姿の青年が安藤繁和さん、藤井の姉の篠（すず）さん、姪の悦子さん、加納俊治さん、篠さんと悦子さんの後ろが小川喜数さん

山内一生先生

藤井達吉先生の直弟子で、唯一ご健在の山内一生先生（94）に当時についてお話を伺いました。山内先生はご高齢にもかかわらずお元気で、ハツラツとした声で話してくださいました。「藤井先生が碧南から疎開して北大野にきたから、小原に工芸ができた！もし来なんだらわしも工芸やらず、百姓でもやっていたわ！」と笑って話してくれた。

第二次世界大戦中の昭和19年、藤井先生は小原村北大野の紙屋さんと関わりがあり、お姉さんと姪御さんと共に鳥屋平へ疎開されました。

唯一ご健在の直弟子の山内一生先生

藤井先生は「小原には三河森下紙があるが傘紙や障子紙漉きだけでは儲からない。だが、芸術作品をつくり、お金を稼ぐ方法を教える」と、そんな言い方で、藤井先生も知恵をしぼって、芸術に触れたこともない田舎の若者を集めたそうです。

「1人前の絵描きには簡単にはなかなかなれないが、俺のいうことを聞いていけば、日本も戦後産業が復興して経済的に良くなるからきっと売れるようになる」とも。

山内先生によれば、藤井先生は弟子には厳しく怖い人で、最初は植物のスケッチから指導を始めました。家の中で想像で描くのではなく、実際に外を歩いて自然を観察しながら描くように指導されたそうです。スケッチブックを持ち歩いていた弟子たちは「藤井ボケ」と呼ばれていたとか。でも、戦後で仕事もなかったから、習うには時期もよかったといいます。初めは絵が売れないし大変だったそうですが、そのうち弟子たちの中から日展に入選する者が現れ、テレビでニュースになるなど話題となったそうです。

山内先生自身も、日展に何度も落ちて、日展にはじめて入選したことが一番心に残っているとも教えてくれました。そして日展に2～3回入選していくと、絵を描く注文が増え本格的に作家としてやっていこうと思ったと言います。

昭和25年に小原から藤井先生が転居されてからも、指導してもらうため碧南まで自転車で通ったり、湯河原にいったときも電車でお手伝いに行ったそうで、師弟の絆の深さも伺わせていただきました。

現在、小原地区では3つの小学校と中学校で和紙づくりが美術の授業に取り入れられており、和紙工芸が身近な存在となっています。地域に根ざした芸術文化として定着しているのは、藤井先生が小原にきたことと、山内一生先生ら直弟子さんたちの努力で、和紙工芸が地域の文化となったことなんだと改めて感じさせていただきました。

今回の取材は、山内先生のお孫さんであり、豊田小原和紙工芸作家でもある山内章平さんが段取りしてくださいました。和紙工芸についての興味深い話をしてくれました。

豊田小原和紙工芸は、近くに画廊や全国的に販売できる場所がないため、作家自身が作品を作り、自分で売るという宿命があると教えてくれました。藤井先生も独立独歩で自身の販路を築いた作家だったため、そのような力強い芸術家としての生き方は学びになったんだと思うと、章平さんは言います。今後、豊田小原和紙工芸が途切れることなく発展し続いていくために、自分たち世代がやっていかないといけないと話してくださり、小原和紙の今後にも期待が持てました。

藤井先生の歌碑の前で説明してくれる山内章平さん

安藤則義さん

藤井達吉先生の直弟子であった安藤繁和さんの息子さんの則義さんにお話を伺いました。

父親の繁和さんは、もともとは大工さんをしていましたが思い切って、藤井先生のもとで工芸を学びました。終戦直後で皆貧しかったのに、いつもスケッチブックを片手にしていたので「藤井ボケ」と言う人も中にはいたようです。

藤井先生との思い出を話してくれる安藤則義さん

則義さんが藤井先生と会ったのは2回か3回、その中で思い出として残っているお話をしてくれました。当時、則義さんは小学校2・3年生。先生が岡崎に住んでいたころ、お父さんが夏休みに岡崎の花火を見せてやるというのでとても喜んだそうです。ですがお父さんからは絶対いい子にしてなくてはいけないと散々言われ、とても怖い先生なんだと思っていたそうです。藤井先生の家に着くと「子どもは何に興味があるかわからんから」と言われ、写真のついた本を何冊もおいてくれたそうです。子ども心に「なんだ、とっても優しいじゃん。」と思ったそうです。

藤井先生は、「和紙が地域に根づいて産業になるには時間がかかる。お前たちの孫に期待する」と言われていましたが、先生の厳しいスパルタ教育と繁和さんらお弟子さんたちのたゆまぬ努力によって、小原和紙工芸は早くに世の中に認められることになりました。

藤井先生は厳しかったと思うけど、山間部の何も知らない若者に工芸を教えるのがとても難しかったのではないか?と話してくれました。今みたいにネットやテレビ、本がたくさんあるわけではない。実際に展覧会へつれていったり、物を見る機会を与えていた。和紙工芸を地域に根付かせた藤井先生はやはり偉大だと思うと語っていただきました。

加納登茂美さん

加納俊治さんの娘さんの加納登茂美さんから、父から聞いている話なので定かではないとのことですが、お話を伺いました。

俊治さんが17・18歳だった頃、紙漉きのとても上手い祖父の鈴木仙五郎さんがいました。それをきっかけに、「藤井達吉」さんという少し変わったおじいさんが小原に入られたので興味本位で伺ったら怒鳴られた！「礼儀を知らないのか、お前は猿か?一体何をしにきたのか?こちらは、最高のおもてなしをしていたのに」と礼儀には人一倍厳しい方だったそうです。

一番不器用で一番下手だったであろう俊治さんは人の2倍も3倍も勉強をしました。ぞんざい（＝いい加減）と良く先生に言われたが先生からもらった一番うれしいエールだったと思います。がんばれ!と。

面白い話も聞きました。白骨温泉に行くからと言われて、親にも旅行に連れていってもらったことがないので、それはそれは喜びました。窓を見てワイワイ皆としていたら、「この景色をスケッチしないでどうするんだ！」と怒鳴られました。白骨温泉でも、ぐっすり寝ていたら鼻をつままれ、写生をしなさいと起こされたり、楽しい旅行だと思っていたのに修行だった、4キロも痩せたそうです（笑）。藤井達吉さんは弟子にはとても厳しかったが、他の方には優しかったようです。

素敵なタペストリーを見せていただきました。登茂美さんがとてもお気に入りのもので、子どもの時、お昼寝の時でもずっと近くに置いていたものだったそうです。鈴木仙五郎さんが製作したもので、藤井達吉さんの影響でこんなにかわいい図柄になったと思うとおっしゃっていました。まったく時代を感じさせない、藤井達吉さんっぽいなぁと思う大きなタペストリーでした。

祖父の仙五郎が作った、登茂美さんのお気に入りのタペストリー

他には、お弟子さんにあえて、東京の国宝を見に行かせたり、皇族の宮家や百貨店の社長のところにお使いに行かせたりし、本物の文化や芸術に直接触れさせることで、教育をしてくれました。お弟子さんとお遍路に行かれたり、晩年、湯河原に住んでいた頃には、大きな作品づくりの手伝いにも1ヶ月くらい行ってきたそうです。「小原の水が美味しいので持ってきてほしい」と言われた時、とてもじゃないけどできないということで、先生宅の近くで水を汲んで持っていったのは内緒の話。今回は藤井達吉先生とのエピソードを沢山を聞くことができました。

藤井達吉先生のおかげで小原独自の和紙工芸の文化ができ、怖くて厳しいだけでなく、本気でお弟子さんを教育してくれた、素敵な方だったということがわかりました。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

M.K
T.S

共同工房での作業風景

楽しみにしていた 石のように硬い押し寿司の話

藤井先生からの手紙は1枚で足りなかったのか、和紙をつなげて書いているのが、可笑しくまた親しみが湧く

勝常夫さんの娘、里美さんから、面白い手紙があるよと言われ、訪ねた。藤井先生の弟子だったが、二足のわらじはダメだと言われ、教員を選んだそうです。まだ弟子だったころにもらった手紙を見せてもらいました。

小原の西細田地区の祭りがあり、毎年名物の押し寿司を藤井先生のところに届けていたが、その日お義父さんに、こんな粗末な押し寿司を持っていくのは失礼にあたると言われ、その年は持って行かなかったそうです。

すると、和紙を継ぎ足した、長い長い苦言?の手紙を藤井先生からいただきました。それも、「常夫」さんなのに、終始何度も出てくる名前の漢字をわざと「恒男」サンと書き綴っていたそうです。その内容は、切々と押し寿司を楽しみにしていたお話。この手紙を読んで押し寿司を持ってきても、祭り用の寿司ではないですよ、それなら来年は持ってきてくださっても来年まで私の命があると思いますか?来年写真に供えてくださっても、うまくありませんとユーモアたっぷり。どうも、子どもっぽい拗ね方をしたようです（笑）。でも藤井先生が待っていたのは押し寿司ではなく、その寿司を届けようという気持ちだったと思います。

藤井先生から送られた「寿石」雅号を押した作品

そして石のように固い押し寿司のエピソードから常夫さんは、後に「寿石」と云う雅号をもらって、落款として日本画などの作品に押していたそうです。常夫さんもきっとユニークな方だったんですね（笑）。

M.K

藤井達吉先生の作品など大募集!

今回の話のように
藤井先生の
作品や手紙、
ゆかりの物などが
ありましたら
取材に伺います。
ご連絡ください。
【連絡先は裏面参照】

藤井達吉の面影を辿って

様々な地で芸術の種を撒き、芽吹かせてきた藤井達吉。総合芸術家として生み出した数々の作品に触れられる愛知県内の身近なスポットを、その歩みに沿って紹介します。

まずは出生の地、碧南市にある「藤井達吉現代美術館」。達吉の作品を中心とした常設展示と、定期的に開催される企画展示があり、どちらも期間ごとに展示される作品が変わるため、何度足を運んでも楽しめる美術館です。誰でも閲覧できる図書コーナーには関連書籍が多数置いてあり、余す事なく達吉を堪能出来る場所となっています。

次は豊田市小原地区にある「小原和紙美術館」。1室丸ごと達吉の作品が並び、別室にはその薫陶（くんとう）を受けた弟子達を始め、現在活躍中の小原和紙工芸作家の作品も展示されています。

また、小原地区の子ども達による作品も展示される企画展等も定期的に行われ、子どもからプロの作家まで、年齢や立場を超え幅広い表現で生み出される小原和紙工芸の奥深さを感じる事が出来ます。

続いては瀬戸市「無風庵」。現在の「瀬戸市陶芸協会」の生みの親でもある達吉が、旧小原村鳥屋平の工芸村の解体に伴い、自身が私財を投じて建設した萱葺きの百姓家を瀬戸市へ寄贈し、移築されたもの。残念ながら2024年1月現在は臨時休館中で中には入れませんでしたが、「瀬戸市美術館」には達吉の作品も所蔵されているとの事で、こちらでも陶芸の師として大きな影響を与えていた事が伺えました。

さて、最後はその歴史に幕を下ろした地、岡崎市。八丁味噌をこよなく愛していたとの話もあるそうですが「岡崎東公園」では歌碑を見る事が出来ます。この歌碑は、達吉の威徳を偲び、愛知県総合芸術研究会により建立され、達吉の直筆が彫られたものとなっています。

生活の芸術家という意識を持ち、自然の中に見た美しさを、人に寄り添ったものに取り込み作り続けた達吉の生み出した作品を知れば知るほどに、その表現力と多様さに心を惹かれていきました。魅力あふれる達吉の縁の地へ是非、足を運び覗いてみてはいかがでしょうか？

Y.S

小原いろいろ情報

【3月31日（日）】
10時受付 10時30分歳事 道慈山観音寺 初午祭
護摩木をご祈祷したい方はお間合せください。［祈祷料三千円］

【5月26日（日）】
小原歌舞伎五月公演

小原ならではの地歌舞伎を無料で楽しめます。（おひねり歓迎）
会場 小原交流館「ザ・小原座」

【6月15日（土）】
踊ろ舞！おいでん小原 with おばらマルシェ

おいでんまつりの地区予選兼プレイベントと地元小原の野菜やグルメ・クラフトショップなどのマルシェを共同開催
会場 豊田市 緑の公園
詳しくは小原商工会まで

おばら地区の物件を探すなら！
豊田市 空き家バンク 検索
www.city.toyota.aichi.jp/akiya/
ようこそおばら委員会の公式SNSに登録してくださいね。
facebook Instagram

STAFF 小原白字感 編集後記

美しい自然と文化のある小原。空から見てくれている達吉さんが微笑むくらい、繁栄し、開けた町になるようみんなで力を合わせやっていきたいです。頑張るよ～！

Y.K（今回編集長）

藤井達吉さんは厳しく近寄りがたい堅物というイメージでしたが、お話を聞いていくうちにとても多才だけど面白くて親近感が持て、ますます深堀りしたくなりました。藤井達吉現代美術館のガチャは楽しかったです！

M.K

藤井達吉の逸話や作品達を知れば知る程、その才能とお人柄に魅かれていきます。それはどこか、小原という地が持つ魅力と重なる様な気がしてならないのは私だけでしょうか？

Y.S

藤井さんは、当時、世界的にみてもアヴァンギャルドだったんじゃないかと思います。碧南の美術館が「現代美術館」となっているのもそういう意味かと。藤井さんのことが、もう少し世間に知られていくといいなあと思いつつ……

ika

ようこそ おばら委員会
発行：2024年3月【ようこそおばら委員会事務局 豊田市役所 小原支所】
〒470-0592 愛知県豊田市小原町上平441-1 Tel 0565-65-2001 Fax 0565-65-3695
E-mail：obara-shisho@city.toyota.aichi.jp 今後、本誌の郵便を希望される方はご連絡ください。